第3307号

教育新聞

週2回 月・木発行
発行所 教育新聞社
〒101-0051
東京都千代田区神田神保町 1-40
代表 ☎ 03(3295)7051
〔購読申し込み・お問い合わせ〕
http://www.kyobun.co.jp/
〔購読料・月額〕2,500円＋税
©教育新聞社 2014

# 子どもの多様な見方を生かす社会科授業

第6回

玉川大学教育博物館研究員・玉川大学講師
多賀 譲治

## 教師のやる気が子どもの興味引き出す

インターネット教材「鎌倉時代の勉強をしよう」を運営していて面白いのは、メールでの子どもたちからの質問である。

「農民はどんなものを食べていたのですか?」「鎌倉時代にもトイレはあったのですか?」「市にはどんなお店があったのですか?」などなど、学者でもおいそれとは答えられないような内容である。

先生が「御恩と奉公」とか「守護・地頭」のことで汗だくになって説明しているときにも、子どもたちは案外こんなことを考えているのだ。トイレのことを聞いてきた子どものクラスからはその後、どうやって拭いていたのかとか、ボットン式だったのかとか、し尿の処理までが質問となって舞い込んできた。

私は「厠（かわや）」の語源や汲み取り式以前に「樋殿式（ひどのしき）」と呼ばれる水洗便所があったこと、西日本ではし尿を肥料としていたことなどを説明した。すると今度は、農業技術と農民の生活についての質問がくるようになった。私にもようやく、子どもたちの後ろにいる教師の姿が見え始めた。

子どもの質問は多岐にわたるが、中には「守護・地頭のことを分かるように教えてください」とか「元寇ってなんですか」のような、基本的な部分で消化不良をおこしている質問も多い。トイレについて聞いてきた子どもたちの素朴な疑問や興味もさることながら、それを巧みに引き出し、次の段階に持っていこうとする教師の思いも伝わってくる。クラスで目を輝かせ、学習を楽しんでいる子どもたちの表情までが見えてくるようだ。

その後、このクラスでは、村の共同作業が増えていくにしたがい農民の意識変革がおこり、やがて室町期に出現する農民一揆にまで結びつけていくことができた。子どもたちは農民が搾取されるばかりの立場ではないことや、武士との関わり合いについてより具体的なこととして捉えられるようになった。小学校6年生でも教師に「やる気」があればここまでできるという好例である。

私は一補助者にすぎない。一方、消化不良をおこし窮余の一策でメールを書いてきた子どもはどうだろうか。少なくとも好奇心でワクワク・ドキドキしながら目を輝かせているとは思えない。同じ時代の同じことを学習しながら、こうも違うものかと思う。

手間のかかることだが子どもと向き合う授業では、まず彼らの素朴な疑問を丁寧にくみ取っていくことだ。教師自らが明確な学習目標を持ち、十分な教材研究をしていれば、個々バラバラだった疑問も互いに関連性を持つようになり、やがて次のテーマへのステップとなる。トイレのことを尋ねるクラスの教師のように、子どもの知りたいと思う心を育てていく姿勢があれば、それは必ず達成される。

しかし、実はもう一つしなくてはならないことがあると考える。とかく暗記重視になりやすい社会科である。人名や年号、地名の暗記は学習を進める上で大切なことだ。

だが、それらは手段であって目的ではない。まずは暗記が幅をきかせている試験改革にも取り組んでみてはいかがだろう。

社会科で一番大切なのは「覚えること」ではなく「考えること」なのだから。